

授業者：坪井 克弘

場 所：校舎 3 階 1 年生教室

1 単元・題材名

武士の台頭と鎌倉幕府

2 単元・題材について

<指導内容 ~学習指導要領より>

(3) 中世の日本 内容(ア)

鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、東アジアの国際関係、応仁の乱後の社会的な変動を通して、武家政治の特色を考えさせ、武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が次第に全国に広まるとともに、東アジア世界との密接なかわりが見られたことを理解させる。

本単元では、日本の中世前半について学習する。中世前半では、武士が誕生・成長し武士政権が成立する。さらに武家社会の仕組みができあがった。

中世前半の特色は、封建制度による支配体制ができあがったことである。封建制度とは、土地を仲立ちとした御家人と幕府の主従関係による領地支配の仕組みである。この主従関係が顕著に表れた出来事が、承久の乱である。従って、本単元を中心になる授業として、承久の乱を取り上げる。

3 生徒の実態

<生徒の学びの実態>

~個別実態把握カルテおよび指導計画上の累積記録より~>

<本時の意図的な指導・援助>

前時までの歴史の流れ『幕府と御家人の御恩と奉公の主従関係』を想起させ、「自分の領地を守るためにはどちらに味方したらよいのか」を問う。

(3) 「対話の目的」「めざす対話」の明確化

→目的や必然性のある対話活動の設定

<本時の対話の目的>

幕府と御家人の主従関係が実際の場面で機能していたことや、承久の乱が及ぼした影響や結果について考えを深めるため

<本時めざす対話の姿>

御家人の立場になって御恩と奉公の関係から課題についての考えを深め、承久の乱以後、武士による政権が確立したことを考えることができる。

(4) 「乗り越える場」の意図的な位置付けと効果的な深めの発問

→乗り越える場の位置と教科の本質にせまる質の高い深めの発問の吟味

<本時願う学びの深まりや広がり>

多くの武士が幕府側に味方した理由となる幕府と武士の土地を仲立ちとした主従関係について、武士の立場から具体的に、多面的に考えることができる。

- ・頼朝公のおかげで、今の領地や地位があるため、恩に報いよう。
- ・幕府に味方しないと、今の領地や地位が奪われるかもしれない。今の領地や地位を守りたい。
- ・幕府のために戦って手柄を立てれば、領地を増やすことができる。

<本時の深めの発問>

御家人たちは幕府のために戦い奉公をしたけれど、本当に御恩(領地)を得ることができたのだろうか。

3 研究内容とのかかわり

(1) 本時身に付けさせたい思考力・判断力・表現力

<思考力>

多くの武士が幕府側に味方した理由を、幕府と武士の土地を仲立ちとした主従関係から考えることができる。

<判断力>

鎌倉幕府の支配体制の中で承久の乱が果たした役割について、自分なりに価値判断ができる。

<表現力>

多くの武士が幕府側に味方した理由を、根拠となる資料や板書を指し示しながら、自分の言葉で説明することができる。

(5) 自己変容(伸び)を自覚できる評価の工夫

→教科の特性に応じた評価方法の工夫

<評価規準>

多くの武士が幕府側に味方した理由を、幕府と武士の土地を仲立ちとした主従関係から考え、自分の言葉で説明している。 【思考判断】

<自己変容を自覚できる評価>

本時の課題設定の折に、4観点のうち本時つきたい力を明示しておき、授業の終末で自己評価する場面を設ける。自己評価について、教師も評価をする。
本時つきたい力(思考力)について、個人追究や対話活動の中で生徒のよさを見つけ、その場で価値づける。

5 題材指導計画

(1) 題材で付けたい力

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・資料活用・技能	知識・理解
武士の台頭・武家政権の成立とその支配の広まりなど、中世の歴史的事象に対する関心を高め、中世前半の鎌倉時代の特色を捉えようと意欲的に追究することができる。	武士の台頭から武家政権の成立、武士の支配が全国に広がるという歴史の流れと、それに伴う社会の変化について、幕府と朝廷の関係や土地制度などから、多面的に考察・判断したり表現したりすることができる。	武士が台頭し武家政権が成立したことと、鎌倉時代の武士や民衆の動きや文化に関して、資料から適切に読み取ったりまとめたりすることができる。	武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が全国に広まったことと、民衆の動きや文化の特色について理解し、その知識を身につけることができる。

(2) 題材指導計画 「武士の台頭と鎌倉幕府 全6時間」

	ねらい	おもな学習活動	評価規準	意図的な指導・援助	授業後の実態 (カルテ追加記入事項)
1	平安時代後半から鎌倉時代にかけての武士の動きを調べることを通して、武士が起り勢力を広げていったことや、社会が変化したことに関心を持ち、単元を貫く課題を設定することができる。	年表や資料から、本時の学習課題を設定する。 武士の台頭から勢力を広げるまでの流れを調べ、理解する。 単元を貫く課題を設定し、学習の見通しをもつ自己評価と振り返りをする。	年表や資料から、武士が起り勢力を広げていったことや、社会が変化したことに関心を持ち、鎌倉時代の武士の動きについて、単元を貫く課題を意欲的に考えている。【関意】	・前時まで学習を想起させ、年表や資料から中世と古代の特色比較させることで、政治の中心が朝廷や貴族から武士に変わったことに気付かせる。 ・時代の流れと変化が分かるように、書き込み式の学習プリントを準備する。	
2	院政による世の中の混乱によって力をもった平氏と源氏の権力争いから鎌倉幕府成立までの流れを調べ、源氏中心の政治から武士中心の政治に変わったことを理解することができる。	前時の振り返りから、学習課題を設定する。 平氏と源氏の権力争いから鎌倉幕府成立までの流れを調べる。 政治の中心が武士に変わったことを理解する。 自己評価と振り返りをする。	院政によって世の中の混乱したことで、武士が勢力を広げ、源氏と平家が権力を争った結果、源氏が鎌倉幕府を開き武士中心の政治に変わったことを理解している。【知理】	・資料や年表、学習プリントにより、院政から平氏と源氏の権力争い、鎌倉幕府成立までの流れが捉えやすいようにする。 ・「成立した幕府の政治は、朝廷や貴族、平氏と同じだろうか」と問いかけることで、次時に興味関心をつなぐ。	
3	資料から 鎌倉幕府の政治の仕組みを調べることを通して、源頼朝が全国に守護や地頭を置き、御家人との間に土地を仲立ちとした主従関係を結ぶことで、武士が支配する社会をつくるうとしていたことを読み取ることができる。	前時の振り返りから、学習課題を設定する。 鎌倉幕府の政治の仕組みを調べる。 源頼朝が御家人との間に主従関係を結ぶことで、武士が支配する社会の仕組みをつくるうとしていたことを理解する。 自己評価と振り返りをする。	資料から、源頼朝が全国に守護や地頭を置き、御家人との間に土地を仲立ちとした主従関係を結ぶことで、武士が支配する社会をつくるうとしていたことを読み取っている。【資技】	『鎌倉幕府のしくみ』 『将軍・御家人・農民の関係』 『守護と地頭』『鎌倉の地形』 ・幕府の政治と、それまでの朝廷や貴族、平氏の政治とを比較することで、武士による支配の特色に気づくようにする。 ・「御恩と奉公のもとで、武士や民衆はどのような生活をしていたのか」と問いかけることで、次時に興味関心をつなぐ。	
4	武士や民衆の生活の生活の調べることを通して、武士は農業に従事する質素な生活を送るだけでなく、幕府への奉公に備えて武芸の稽古をし、領地を守っていたことや、農業や商業が発展したことが理解できる。	前時の振り返りから、学習課題を設定する。 武士や民衆の生活の生活の調べる。 武士の生活や農業や商業が発展について知る。 荘園をめぐる領主と地頭との対立から、朝廷と幕府の二重支配があることに気付く。 自己評価と振り返りをする。	武士は農業に従事する質素な生活を送るだけでなく、幕府への奉公に備えて武芸の稽古をし、領地を守っていたことや、農業や商業が発展したことを理解している。【知理】	『武士の館』『下地中分の絵図』 ・『一所懸命』の言葉から、武士にとって領地が命を懸けるほど重要であったことに気付くようにする。 ・朝廷と幕府の二重支配から、幕府の支配が全国に及んでいなかったことに気付かせ、次時に興味関心をもてるようにする。	
5 本 時	承久の乱で多くの御家人が上皇ではなく幕府に味方した理由を考えることを通して、御家人が頼朝公との間に結んでいた主従関係から「その恩に報いよう・武士の地位や領地を守り、領地を増やしたい」という思いがあったことを考え、さらに承久の乱後、幕府の支配が全国に及んだことを考えることができる。	源氏の血筋が絶えたことと承久の乱がおこったことを知り、学習課題を設定する。 多くの御家人が幕府に味方した理由について調べ考える。(幕府が勝利した結果、御家人たちが考えた通り、御恩として領地を増やすことができたか考える。) 味方した理由や承久の乱後の幕府の支配の広がりについて、まとめる。 自己評価と振り返りをする。	多くの武士が幕府側に味方した理由を、資料や前時までの学習をもとに、幕府と武士の地とを仲立ちにした主従関係から考え、自分の言葉で説明している。 【思判表】	『源氏の家系図』『北条義時追討の院宣』『北条政子の演説』『鉢の木の話』 『承久の乱後の土地の支配の様子』 ・上皇が絶対的な権威をもっていたにも関わらず、幕府に味方した御家人が19万人もいた事実を知らせることで、強い課題意識が生まれるようにする。 ・前時の『一所懸命』からも考えられるように助言する。 ・「幕府が勝利して御家人たちの思いが本当になかったのか」と問いかけることで、幕府の支配が全国に及んだことを考えられるようにする。	
6	資料から、鎌倉時代に新しく起こった仏教や文化の特色を調べることを通して、力をつけてきた武士や民衆に簡単に分かりやすく心のよりどころとなる仏教が広まったことや素朴で力強い文化が生まれたことを調べることができる。	鎌倉時代に新しい仏教や文化が起こったことを知り、学習課題を設定する。 鎌倉時代に新しい仏教や文化の内容と特色を調べる。 新しい仏教や文化の特色とその時代背景についてまとめる。 自己評価と振り返りをする。	資料から、新しい仏教が簡単に分かりやすく心のよりどころとなったことから武士や民衆に広まったことと、文化の特色が素朴で力強いということを読み取っている。【資技】	・事前に生徒の家の宗教について調べさせておくことで、本時への意欲化を図る。 ・新しい宗教や文化の内容を簡単にまとめるための学習プリントを準備する。 ・宗教と文化の特色を時代背景から考えられるように、前時までの学習内容を想起できる助言をする。	

6 本時のねらい

承久の乱で多くの御家人が上皇ではなく幕府に味方した理由を考えることを通して、御家人が頼朝公との間に結んでいた主従関係から「その恩に報いよう・武士の地位や領地を守り、領地を増やしたい」という思いがあったこと、さらに承久の乱後、幕府の支配が全国に及んだことを考えることができる。

7 本時の展開（4 / 6）

週	学習活動	指導・援助の手立て、留意点
つかむ	1 導入 - 源氏の血筋が絶えてから承久の乱までの流れを知る。 - 承久の乱の様子について知る。 - 絶対的な権威がある上皇が北条義時追討の院宣を出す。 - 幕府側の御家人19万人、朝廷（上皇）側の御家人1万数千人 - 頼朝公には御恩があるから味方したい。 - 源氏の血筋が絶えてしまったし、上皇に逆らうことはできないから、上皇側に味方する。 2 課題設定 源氏の血筋が絶え上皇に絶対的な権威があるにも関わらず、なぜ19万人もの御家人が上皇側ではなく幕府側に味方したのだろうか。	『源氏の家系図』 『北条義時追討の院宣』 『幕府軍と上皇軍の勢力』 【課題意識をもたせる手立て】 - 前時までに上皇（朝廷）に絶対的な権威があったことをおさえておき、本時の導入で想起できるようにする。 - 御恩と奉公の主従関係が頼朝公と御家人の間で結ばれていること、頼朝公の血筋である源氏が絶えてしまったことを知らせる。 「もし自分が御家人だったら、幕府側か上皇（朝廷）側のどちらに味方するのか」を問いかける。
考える 乗り越える	3 見通し - 頼朝公が領地を与えてくれたから、その恩を裏切ることができない。奉公しないといけない。 - 上皇側についても得にならない。（上皇は武士のことを見下している。） - 幕府に味方すれば、また領地がもらえるかもしれない。 4 個人追究 - 資料・前時までの学習内容をもとに、自分の考えをつくる。 <資料1> 『北条政子の訴え』 - 御恩と奉公の主従関係を守りたい。 - 頼朝公のおかげで、今の領地やくらし（地位）があるから、裏切れない。今度は奉公で返そう。 - 自分たち（武士）の領地やくらし（地位）を守りたい。 - 朝廷側が勝つと、武士のくらし（地位）が守られなくなる。 - 幕府側に味方しないと、領地や武士のくらしが（地位）保障されない。 <資料2> 『鉢の木の話』 - 幕府によって領地を保障される、または、領地が増やせるという期待があった。 - 幕府に味方すれば、恩賞として領地が保証されるかももらえるかもしれない。 - 手柄を立てればより多くの領地を増やすことができるかもしれない。 前時までの学習と関連して - 御家人は守護・地頭として各地に派遣してもらうことで、各地の公領や荘園から収入を得ることができた。（実質は、自分の領地として支配ができた。） 『一所懸命』の言葉通り、武士にとって領地は命をかけて守るべき大切なものだ。だから、上皇側より幕府側に味方した。	<生徒の学びの実態> ～個別実態把握カルテおよび指導計画上の累積記録より～> <本時の意図的な指導・援助> 前時までの歴史の流れ『幕府と御家人の御恩と奉公の主従関係』を想起させ、「自分の領地を守るためにはどちらに味方したらよいのか」を問う。 『北条政子の演説』 『鉢の木の話』 <本時の対話の目的> 幕府と御家人の主従関係が実際の場面で機能していたことや、承久の乱が及ぼした影響や結果について考えを深めるため <本時めざす対話の姿> 御家人の立場になって御恩と奉公の関係から課題についての考えを深め、承久の乱以後、武士による政権が確立したことを考えることができる。
まとめる	5 全体追究（対話） - 教師との対話活動を通して、自分の考えを確かめるとともに深める。御家人が上皇（朝廷）ではなく幕府側に味方したのは、 - 頼朝公との御恩と奉公の主従関係を守るため - 武士（自分）の大切な領地や地位を守るため - 武士（自分）の領地をさらに増やすため - 資料『承久の乱後の土地の支配の様子』をもとに、課題についてさらに考えを深める。 - 承久の乱後、幕府の支配する土地が増え、新しい土地に守護・地頭が置かれたので、御家人たちは領地を増やすことができた。 - 武士が領地やくらしを守り、さらに領地を増やすために幕府側に味方したことが分かった。 - 承久の乱によって、鎌倉幕府（武士）の支配がより全国へ広がった。 6 まとめ - 本時学習したこと（課題についての結論）をノートに記述し、発表する。 多くの御家人が幕府に味方したのは、「御恩と奉公」という強い主従関係が御家人と鎌倉幕府の間でできあがっていたからだ。御家人は自分の領地や地位を守る、さらに領地を広げるために幕府に味方した。幕府が上皇に勝利したことで、承久の乱の後、幕府の支配が全国へ広がった。これで、天皇や貴族中心の政治から武士中心の政治に完全になったと思う。 本時扱えなかった「御成敗式目」は、次時で補足する。 7 本時の振り返り - 本時つけたい力（思考力）について自分のよかったところや伸びを話す。 - 教師が本時つけたい力（思考力）について生徒のよかったところや伸びを話し価値づける。	『承久の乱後の土地の支配の様子』 主従関係は、頼朝と御家人から、幕府と御家人の間でも成立していたことを問いかけによりおさえる。 <本時願う学びの深まりや広がり> 多くの武士が幕府側に味方した理由となる幕府と武士の土地を仲立ちとした主従関係について、武士の立場から具体的に、多面的に考えることができる。 - 頼朝公のおかげで、今の領地や地位があるため、恩に報いよう。 - 幕府に味方しないと、今の領地や地位が奪われるかもしれない。今の領地や地位を守りたい。 - 幕府のために戦って手柄を立てれば、領地を増やすことができる。 <本時の深めの発問> 御家人たちは幕府のために戦い奉公をしたけれど、本当に御恩（領地）を得ることができたのだろうか。 <評価規準> 多くの武士が幕府側に味方した理由を、資料や前時までの学習をもとに、幕府と武士の地とを仲立ちにした主従関係から考え、自分の言葉で説明している。【思考・判断・表現】 <自己変容を自覚できる評価> 本時の課題設定の折に、4観点のうち本時つけたい力「思考」を明示しておき、授業の終末で自己評価する場面を設ける。自己評価について、教師も評価をする。 本時つけたい力（思考力）について、個人追究や対話活動の中で生徒のよさを見つけ、その場で価値づける。